

臺灣日蝕紀行 (4)

Trip for Formosa Eclipse

井 本 進 *Susumu Imoto*

1941年九月23日 (火)

愈々今日の午前11時基隆出帆の同じ高砂丸に乗船内地へ歸へるのだ。午前9時頃臺北驛を山本博士と伴に出發する。臺北天體觀測同好會の方々及筆者の會社の人々多數にてプラットフォームまで見送つて頂く。

再び航海が続く。今度は一等11號室である。船はアジンコト島を過ぎて、又一望海原の中をわけ進んで行く。船中、觀測の時刻を精確に算出する爲め、何回もラヂオの時報とブリッヂのクロノメータに合はす。結果は大體下記の通りである。

ウオルサム時計誤差測定表

時 刻	時計の示度 (遅速±)	(1)の時刻よ りの 實誤差	(1)の時刻よ りの 間 隔	一 時 間 當 りの 誤 差
(1) 9月21日22時	-1分10秒	—	—	—
(2) 9月22日22時	-2分 9秒	-59秒	24時間	-2.458
(3) 9月24日19時	-3分52½秒	-162.5秒	69時間	-2.355
(4) 9月25日8時30分	-4分31秒	-201秒	82時½	-2.446
平 均	-2.420

従つて其の時計で九月21日午後1時10分0秒を指示して居た場合、正しい時刻を求めるには前記の1時間當りの誤差-2.420秒に(1)の時報の時刻との間隔9時間を乗じた時間即ち2秒420×9(時間)=21秒78を(1)の時報の際の時刻の遅速-70秒より差引修正する必要がある。従つて正しい時刻は

$$70\text{秒}(1\text{分}10\text{秒}) - 21\text{秒}78 = 48\text{秒}22$$

だけ進めて、午後1時9分12秒となる譯である。

自分は今回の觀測旅行で今更らながら次の三つの経験を體得した。讀者の御參考までに附記することとする。夫れは

- (1) 満足な觀測結果を期待する爲めには、一度は必ず皆既日蝕觀測の経験を持つて居ること。初回の觀測は成功を期待出来ない場合が多いであらう。
- (2) 時刻を精確に保つことが特に必要であること。時刻を合はすには徒らに針を動かさず誤差丈けを讀みとること。又上記の様な誤差の大きい時計

を持つて観測に當ることは多少冒険であること、従つて平常から自己の時計の性質をよく熟知して置くこと。

- (3) 第一段、第二段、第三段の準備が必要なこと。一つが失敗なれば次は何をする？ 夫れが失敗なれば何うするか？ 山本博士の言を借りて云へば「和戦兩様の構へ」が必要なこと。

- (4) 時計係以外助手は一人あることが望ましい。

以上の諸點は次に來る北海道日蝕観測に備へて考慮する必要があらう。

九月24日 (水)

夕刻、高砂丸練習生行木速雄氏ナスキが船室へ遊びに來られた際、同氏が基隆で皆既日蝕を双眼鏡で見た有様を話された。夫れによると

- (1) 丁度荷役中で忙しかつた爲め、餘りよく注意しなかつたが、皆既は2分位續いた様に感じた。併し時計を見た處、1分20~30秒餘りだつた。プロミネンスは5個位見えた。
- (2) 又荷役中の臺灣人人夫は、蝕の初めと皆既と蝕の終りの時刻とを自己の時計で計つて、紙片に記録し、自分に見せて呉れた。自分は夫んな時間は航海年表に載つて居るとて捨てゝしまつたが、今考へれば置いておいたらよかつた。

斯んな話であつた。

又山本博士と同郷の方で日本肥料株式會社企畫部長堀氏(大正3年頃膳所中學出身)の御話は次の通り、商用で渡臺された同氏は臺北の宿で日蝕を見られたのであつた。

- (1) 宿で電氣を點じた。
- (2) 鶏が時刻をつくつた。
- (3) 鳩が巢へ戻つて來た。
- (4) 合歡木ネムノキの花がしぼんだ。

次ぎは鹿兒島の坂上氏が臺北帝大附屬醫專の一助教授より聞かれた話。

- (1) 臺北では午後1時33分より約10分間金星が見えた。
- (2) これは又聞きであるが、淡水のゴルフリンクでは黃道光が見えた。夫れは太陽の兩脇に銀河の様に擴がつて居た。
- (3) 臺北では午後1時50分頃雲の切れ間から日暈(ハロ)が三段になつて見えた。
- (4) 猫があばれた。
- (5) 一中學生が動物園で觀察した處は左の通りであつたと云ふ。
- (イ) 鯉が池の底トキに沈んで行つた。
- (ロ) 鶏が時刻をつけた。

(ハ) 小鳥が一齊に慌て、飛んで行つた。

(6) 臺北市内の本島人が日蝕を色硝子で見つて『何んぢや3日月でないか』と云つたとのことだ。

(7) 神戸の高田時醫學博士の話に、人間には意の儘にならぬ特別な神経があるが、夫れが日蝕時には活動して心臓が動悸をうつと。

此外、話題は様々数々ある。a 氏の話。

(1) 明るい時は小鳥が空の方に上つたが、日蝕で暗くなつた時は下の方へ降りた。

(2) 夕方でないとう鳴かない蟬がないた。

(3) 明るい時に池の眞中でないと釣れない魚が池の縁でよく釣れた。

b 教授の話。

(1) 合歡木の花が萎んだ。

(2) 夕顔を観察したが判然としなかつた。

c 氏の話。

(1) 臺北の舊市街萬華では婆さんが線香を立て、日蝕を拜んだ。

(2) 小供達が太鼓やブリキなど鳴るものを敲いて騒いだ。

(3) 御寺では鐘を鳴らした。

d 氏の話。

(1) 鶏が小舎へ歸つて來た。

(2) 小鳥が騒いだ。

(3) 本島人の百姓が薪を割つて居たが急に暗くなつて吃驚した。

(4) 皆既の際、西方に明るい星が見えた。(木星又はシリウスか)

又吉田長祥氏は林本源邸で日蝕觀測されたが同邸の本島人は乾物を取り入れたとのこと、過日の公會堂の會の席上で話しがあつた。船はピッチングで甚だ揺れる。夕食後少し氣分悪く、早く就寢する。

九月25日 (木)

午前11時頃無事門司に着き上陸する。

山本博士は目下建設中の田上天文臺の工事に御多忙の爲め急遽正午過ぎ下關發の列車で歸宅になつた。

自分は福岡方面に立寄り、34日滞在し、歸宅したのは29日早朝であつた。

(終)

後記 本文は歸途高砂丸の船中から筆を起したのであるが、歸宅の後、公私多忙の爲め書き續けることが出來ず、漸く只今書き了つた處である。

(昭和16年十月26日夜)